

日中戦争前後における日中間交渉の一形態 —王子恵と彼を巡る人々—

関 智英

I. はじめに

1) 研究の目的

日中戦争時期のいわゆる対日協力政権については、当該政権を傀儡政権とするか、対日協力政権とするか、あるいは占領地政権とするか、といった視角の置き方に議論はあるものの、ここ二十年近い研究の深化により、事実関係についてはかなりの部分が明らかにされた。筆者自身もこうした成果に強く啓発を受けてきた。

本稿では、1938年3月に南京に成立した中華民国維新政府（以下維新政府）の樹立に深く関わり、同政府で実業部部長を務めた王子恵なる人物の事績を整理考察する。その際、日本占領地の政権に関わっていく王の行動に出来る限り即した分析を目指す。また王子恵が戦後も活動している点にも注目し、その活動の戦中と戦後の連続性についても検討する。

従来の中国史研究では、王子恵については、専論はむろんのこと辞書的な説明もほとんどなかった。これには王子恵が維新政府に参加するまでは政治的に無名であったこと、維新政府実業部部長として政治の表舞台に登場するも、在任一年余で辞職したこと、また1940年4月に南京に成立した汪精衛政権（以下汪政権）とは距離を取ったこと、などが背景にあると考えられる。加えて王子恵と交渉のあった日本人の中にも、その評価について相反する見解が存在したことで、王の人物像が一層とらえにくいものとなったと思われる。総じて、王子恵を説明する事が難しかったということは言えそうである。王子恵の存在は日中関係史の中で忘れられ、宙に浮いたままになっているのである。

にもかかわらず王子恵について言及する回想録など史料を相互に検討すると、そこには維新政府樹立前夜の日中交渉の水面下の動向や、対重慶国民政府和平工作最前線の具体的な動きの一端を垣間見ることができる。王子恵が戦中のみならず戦後も日中の中で活動している点も興味深い。このため王子恵の経歴・活動を検討することで、これまでの研究では光が当てられてこなかった日中交渉、当該時期の中国社会の一端を明らかにすることができると思う。

以下、本稿では王子恵に関する史料を整理した上で、維新政府時期、対重慶和平工作時期、さらに戦後の動きを追い、上記問題の解明を試みる。

2) 王子恵に関する史料

王子恵がこれまで中国史研究の上で注目されてこなかった理由の一つに、王が脆弱な政府とはいえ部長職（日本の大臣に相当しよう）に就任するも、在任1年余で辞任したことがある。また一部の例外（*Who's who in China: Biographies of Chinese Leaders* 等）を除いては、当時の人名録の類への掲載がなかった点も関係していよう。偶然のことながら、王子恵の部長在任（1938年3月～39年8月）は、日本での中国人人名録編纂のピークを外れていた。

王子恵の名前が日中双方で広く知られるようになった1938年は、当時日本語による最も詳細な中国要人録の一冊であった外務省情報部編纂『現代中華民国満洲帝国人名鑑』の昭和12年版出版の翌年であった（結局外務省編纂の中国人人名録は戦前では同版が最後となった）。また、王子恵が実業部部長を辞し、政界の表舞台から離れたのは、汪精衛らの和平運動が具体化し、当時の「新中国」情勢に対応した書籍の出版が盛んになる直前であった。巡り合わせが悪かったと言えればそれまでだが、この狭間の時期と王子恵の活動時期が重なったこともまた、王子恵の事跡を後世に残りにくくしたと思われる。民国時期の人物辞典として知られる『民国人物大辞典』にも王子恵の項目はない。

下の引用は、1939年に日本で出版された中国事情のハンドブックに掲載された王子恵の略歴だが、こうした記述は例外的なものと言える。内容は同時期の新聞報道等が伝えた王子恵の経歴などとも符節を合わせ、当時伝えられた平均的な王子恵の経歴と言えよう。

維新政府実業部長、福建の人で一八九二（明治二十五）年生れ、早稲田大学出身、日本語の巧みさは日本人以上である。新聞記者、社長を経て国民軍第二軍の駐滬辦事処長、国民革命軍第二十軍副軍長兼政治部主任等の経歴を持ち、上海実業界に特殊の勢力を張ってゐた。維新政府生みの親の一人で、反蔣反共の態度に於て、新東亜建設の意気と信念に於いて、維新政府内部の最も熾烈な一人である。ダークホースとしてその将来は注目すべきものがある（新東亜研究会，p.148）。

この中で王子恵がいみじくも「ダークホース」と指摘されている点は、象徴的である。日本軍が華中の占領地工作を進める中、王子恵はまさに「ダークホース」として政治の表舞台に登場し、そして足早に去って行ったのである。

辞書的な説明の少ない王子恵だが、一方で維新政府に関わった複数の人々の回想録や日記に登場することが確認される。また外務省の記録からもその活動の一端がうかがえる他、重慶側で和平工作に関わった人物の証言もある。こうした情報、とりわけ回想録は単独で用いるには信憑性に問題が残るものの、複数の証言を相互比較検討することで、本稿が扱うような事象を明らかにするには有用である。

王子恵について記録した日本人は大きく次の4つに分かれる。第1に、1920年代から上海で王と交流のあった人々である。長田実・頓宮寛^{とんぐうゆうたか}（共に医者）がこれに該当する。彼らは王を肯定的に評価している。第2に、維新政府樹立から、その後の和平工作で王子恵

と関係を持った人々である。萱野長知・岡田尚（松井石根通訳）・林秀澄（中支那派遣憲兵隊）・小川平吉（元鉄道大臣）・岩崎清七（実業家）・大川周明らがこれに該当しよう。彼らの中には林のように王に否定的だった人間も含まれている点は留意したい。第3に、外交官である。これには当時上海総領事館に勤務していた岩井英一（副領事）・森島守人（参事官）が該当し、両者共に王に懐疑的である。第4に、ジャーナリスト及びその周辺にあった人々である。野依秀市（実業之世界社社長）・山本実彦（改造社社長）・木村英夫（新聞記者）・丸山静雄（朝日新聞記者）、尾崎士郎（作家）・北吟吉（思想家・代議士）等がこれに該当する。このうち野依・山本・尾崎は王子恵を高く評価している。とりわけ尾崎が王子恵を激賞していることは、当時の日本における王子恵報道のあり方も含めて興味深い（詳しくは後述）。

一方、中国側の記録には陳器伯（維新政府行政院簡任秘書）、賈存徳（孔祥熙秘書）の回想、また胡鄂公の書翰がある。その内容は、日本人関係者の回想と事実関係についてはほぼ符節を合わせており、王子恵が維新政府を離れた後も日中の水面下で交渉していたことの傍証となる。

ただ、日本側の報道・回想に王子恵の人となりやその積極的な発言を伝える記録が多いこととは対照的に、中国側の記録には王子恵が政治的に無名で、正体不明の人物であるということ以外に、王子恵の人となりを伝えるものはほとんどない。維新政府成立前後の動きを詳細に孔祥熙他に伝えた胡鄂公も、王子恵については「台湾人王某」としか触れていない（中国第二歴史檔案館）。中国側の史料に王子恵の記述が少ない背景には、もちろん、維新政府参加以前の王子恵が政治的に無名だったこともあろうが、加えて幼少期から日本で過ごした王子恵があまり中国語に堪能でなく、維新政府の会議も欠席しがちであった、という証言を裏付けているように思われる（丸山静雄，p. 68，木戸日記研究会，p. 89）。

Ⅱ．維新政府前後の動き

1) 維新政府以前の経歴

維新政府成立以前の王子恵については不明な点が多い。当時の紹介記事によれば、王子恵の両親は「セレベス島の華僑として羽振りを利かしてゐた」（馬郡健次郎，p. 93）といい、王子恵は父親の仕事の関係で6～7歳の頃に渡日。麹町の小学校に入学し、以後一貫して日本に滞在し、1919年早稲田大学を卒業（『読売新聞』1957）、北京で『国風日報』編輯長・『正義日報』社長となった。その後、国民軍第二軍の駐滬辦事処長、国民革命軍第二十軍副軍長兼政治部主任、国民政府総参議処代表中日経済研究会員等を歴任したという（『揚子江』，p. 83）。ちなみに、早稲田大学卒の経歴だが、同大学紳士録では正式な卒業生ではない「学友」とされている（早稲田大学紳士録刊行会，p. 199）。

このうち、北京での具体的な活動は不明だが、無政府主義的傾向を持ち、中国同盟会員として辛亥革命にも参加した景梅九が、同時期北京で『国風日報』という新聞を発行していたことを考えると、王子恵がこれと何等かの関係があった可能性はある（景梅九，

pp. 216-217)。青年期の王子恵が、無政府主義的傾向を持っていたことは、北吟吉も「王君は一種の革命児なり（中略）彼は青年時代の思想傾向を語りたるが、支那人の理想家の共通点ともいふべき、無政府主義的傾向を有したり」と証言している（北吟吉 1938a）。

しかし、王子恵はその後反共に転じたと思われる。王子恵と義兄弟の契りを結んでいた長田実は、1920年代末に王子恵は「昨今でいふ防共運動、即ち反共產主義運動」をやっており、長田も「王子恵君を助勢して、日支両国の融和親善をはからうと思ひ立ち、共に力を合せて国事のために奔走しよう、と誓ふ仲になつた」と回想する。そして王子恵は「胡漢民のやうな大先輩を始め、蔣介石、汪兆銘、于右任、宋子文、王正廷などの諒解を経て、絶えず〔日中〕双方の接近を工作し」ていたという（長田実、p. 266）。

こうした事情を勘案すると、王子恵は北伐後国民党に接近し、党の要人とも実際関係を持っていたと思われる。萱野長知によれば、「上海の仏蘭西租界の宋公館で、蔣介石氏に会つた時、〔王は〕蔣先生の取次ぎ見たいな事をしてゐた」という（小川桑兵衛、p. 101）。王自身も蔣介石と関係があつたことを「蔣介石とは昔から肚が合はない」、蔣介石は「意地ツ張りで、強い意志を持つてゐるが雅量に乏しい」などと語っている（野依秀市、1939、p. 306）。

この時期、日中の経済提携に向けた動きに王子恵が関わっていたことも興味深い。王子恵によれば「事変前には汪精衛も協力して、上海で「連亜興業公司」の樹立工作に力を注ぎ、「九分九厘まで漕ぎつけ乍ら、例の八・一三事件の勃発によつて、遂に跡方もなく潰れ去つて了つた」という（王子恵、1938b）。

連亜興業公司の具体的な内容は不明だが、これについては頓宮寛（福民病院院長）の回想が傍証を提供する。頓宮は「満洲事変進行期で時期をはっきりと思い出せませんが、中国友人、王子恵は当時国民政府の王者である宋子文を背景に、満洲事変不拡大の一策として、先ず上海に中日合弁『連亜実業公司』と称する両国間通商を一手に引き受ける公司を開設する案」を立てたという。

その中身は「当時猛進しつつある日貨大排斥中の重要品目である人絹を筆頭に他の物資も逐次解禁して、両国民の緊張を解消し、侵略行為や戦争を不必要不可能にしようとする」もので、「先ず在留日本人殊に大商事会社上海支店長級数名を主役とし、有力中国人数名と共に秘密会談を」し、中国側には上海総商会の王曉籟もいた、と証言している（南堀英二、p. 162）。中国の実力者を巻き込んだ計画が水面下で進められていたことは確かと思われる。

王子恵について「事変前までは、名もなき市井の知日家として、上海方面で日本人の間を遊び廻つてゐた」との説明は、上述のような事情を指してのものであろう（報知新聞政治部、p. 45）。

2) 維新政府樹立工作

1937年7月に勃発した日中戦争は、王子恵に大きな転機を齎した。8月には上海でも戦闘が始まり、上海を占領した日本軍は11月に浦東に上海市大道政府を樹立し、占領工作

の第一歩を踏み出した（関智英，2007）。また1938年1月1日には、かつての国民政府の首都南京に陶錫三を委員長に南京市自治委員会が成立した。その後も日本軍占領地には、都市を単位にこうした自治委員会が次々に成立していった（関智英，2014）。

王子恵の出馬

占領地経営が具体化する中、日本占領当局（中支那方面軍，1938年2月14日に中支那派遣軍に再編成）が求めたのは、都市レベルで成立していた上述の各種政府・自治委員会を束ねるより強力な政府の樹立であった。

華中の政権樹立工作については、松井石根の通訳として深く関わった岡田尚の回想が、管見の限り最も詳細に事情を伝えるものとして貴重である（岡田尚，1980，pp. 184-185）。岡田らの動きには中国側の傍証もある（李文浜，p. 184）。岡田尚の父親有民は、大倉組上海支店長などを務め、松井石根・坂西利八郎ら「支那通」軍人とも交流があり（岡田尚，1936）、岡田尚もその繋がりで松井の秘書を務めていた。

当初、日本側が新政府の首班に擁立を目指していたのは、中華民国初代国務総理で、その後も政界の元老と目されていた唐紹儀であった。しかし、唐紹儀は老齢を理由に出馬を拒否し、次に想定されていた李思浩（安福派の財政家、中国銀行総裁、財政部総長等歴任）も香港へ逃亡した。

こうした事態に対し、司令部の臼田寛三は唐紹儀のためのポストとして政府首班を空位としておき、先にそれ以下のポストを固める方針を取った。唐紹儀と同郷で関係の深かった温宗堯（後に維新政府立法院院長）もこの案を支持したという。しかし、唐紹儀は結局出馬せず、維新政府成立後の1938年9月30日、その出馬を恐れていた重慶の国民政府によって暗殺されることになる（夏文運，pp. 120-122，上法快男他編，p. 347）。

王子恵が新政府の首班として急浮上したのはこうした人選工作が進む中であった。森島守人によれば、王子恵を司令部の臼田寛三・長勇らに紹介したのは先述の頓宮寛で、「王は容姿端麗、弁舌爽やかでしかも一種の魅力を具えていたものか、一見旧知の如く臼田、長の信任を博した」という（森島守人，p. 146）。

孫中山の革命運動に協力して以来、国民党要人と繋がりを持っていた萱野長知も王子恵を推した一人であった。当時萱野は松井石根の「私的最高顧問」を務めていたが、「単に名望があつて仕事の出来ない人物を揃へるよりも、〔新政府樹立工作は〕殆んど革命をやる様な仕事であるからといふので、少壮有為の士を以て政府を構成する様に松井大将に進言し」、王子恵を「在支四十年斯くの如き人傑に接しない」と「推称し」た（北吟吉，1938b，pp. 11-12）。当初は蒋介石との繋がりを持つという触れ込み（辻政信によれば、王子恵の維新政府参加は、重慶側の諒解の下であったという（辻政信，p. 288）を買って、松井石根も「王を推挙することに賛同した」（森島守人，p. 146）という。

北吟吉によれば、この頃王子恵は「〔中華民国の〕五色旗は満蒙回蔵漢の五族共和を意味するもの」の、「満洲帝国は既に独立し、蒙疆自治政府は新たに成立し、回教は宗教にして回教徒は一民族を意味せず、西藏また半独立国」という現状を考えると、「維新政府の成立は単なる政府の更迭に非ず、寧ろ新国家の創設を意味す」るものであるから、「中

華民国の国号及び国旗の五色旗を変更せんと主張」していた¹⁾。そして王子恵を支持する「某々大佐，某々中佐及び民間志士等，大に共鳴し，王君の案に依る新国旗，日本の日の丸の赤地を白くし，白地を赤くせる旗を幾千用意」したという（北吟吉，1938a）。

この証言は、先の萱野長知の「殆ど革命をやる様な仕事」という意識とも符節を合わせ、当初、華中の新政府樹立工作が、中華民国という政体の解消も含めて検討されていたことを伝えている。

王子恵への批判

しかし王子恵擁立には、王の不透明な経歴等を理由に、海軍省と外務省が猛烈に反対した（田尻愛義，「中支新政権組織大綱」）。さらに岩井英一により，「王〔子恵〕は台湾の出身，第一次上海事変後に起きた天長節祝賀会場における爆弾事件について，真犯人を手引きするとて，陸海軍を欺き吳淞までわざわざ駆逐艦をも出させた曰くづきの人物，往年の王晦知」に他ならない，という情報も齎された（森島守人，p. 146，岩井英一，p. 401）。

こうしたこともあり松井石根も「怒気荒々しく，そんな中国人か台湾人か得体の知れぬ人間を首班にすることは自分が最高指揮官でいる間は絶対に許可することはできない。長〔勇〕中佐にはそんな馬鹿な工作は中止するようおれが命令する」とし，その代りの候補として梁鴻志・陳羣・温宗堯の3名を提示し，結局梁鴻志を中心として維新政府樹立工作が進められることになった（関智英，2013）。

しかし，王子恵排除の動きに，それまで王擁立に動いていた臼田寛三・長勇らは激しく抵抗した。森島守人によれば「窮地に陥った臼田，長は，王反対論を撃滅するため，神楽坂や浅草方面から多数の無頼漢を集めて謀略や暴力的手段に訴」え，同じく維新政府樹立に関わっていた軍人の原田熊吉や楠本実隆にも憲兵の護衛がつく事態となった。また，彼らは孫中山以来，中国との関係が深い山田純三郎を「一室に監禁して，山田の王反対を難詰し，拳銃と日本刀とで脅迫の末，王に賛成するとの一札をとりつけた」という（森島守人，pp. 146-147）。

このため王子恵は首班ではなく，外交部参事の就任で話が進められたが，王が土肥原賢二に訴えたこともあり，結局実業部部長に就任することで話は纏まった（陳器伯，p. 85）。

3) 王子恵の将来構想—維新政府における発言

当時王子恵は，国民党批判を展開したことで知られており，その議論で三民主義は夜店の古本屋から拾い集めた程度の思想（王子恵 1939b）で，三民主義が良いならば，五民主義や十民主義はなおさら良い（報知新聞政治部，47 頁），などと述べていた。王子恵は自らの展望を，「アジアの理想」ないしは「アジアの明日」といった言葉で，積極的に披瀝

1) 同時期，王子恵と同様に五族共和が事実上崩壊しているという現状をもって，中華民国の前提が崩れたと主張した人物に張鳴がいる。張鳴の義父が萱野長知であったこと，また張鳴と王子恵が「不俱戴天の間柄」であったという大川周明の証言を踏まえると（大川周明顕彰会，p. 193），両者の関係は興味深い。張鳴については別稿を準備している。

した。王の将来構想について、かつて筆者は検討を加えたが（関智英，2013），新たな史料もふまえここで整理しておきたい。

王子恵の議論は、維新政府の実質的機関誌として上海で発行されていた雑誌『中華新声』や、実業部刊行『実業月刊』の他、複数の日本の雑誌にも確認できる。こうした個別の論文は、後に自身の論集として『亜細亜の明日を語る』（亜細亜書房，1938年）及びその中国語版『亜細亜之理想』（1938年）として纏められている。以下『亜細亜の明日を語る』（同書からの引用は頁数のみ記す）を適宜他の史料で補い議論を整理する。

亜細亜の理想／亜細亜の明日

王子恵の議論の中で頻繁に登場するキーワードが、「亜細亜の理想（亜細亜の明日）」であった。王子恵は、「日支両国の間に結ばるべき同盟は、両国国民の心と心とが先ず結び合つた上に打ち建てられる同盟でなければなら」ないと、日中の提携を説いた。そして同盟は「現実の必要に基いてのみ生み出されるもの」ではなく、「理想が先づ両国々民の心を衝いて、その所産物として作り上げらるべきもの」と説明した。

その理想を王子恵は「アジアの絶対性と至上性を確信する理想」と述べている（王子恵，1939c）。王子恵によれば、日中戦争の原因は「亜細亜の精神」が喪失したため（p. 4）、「失はれたる亜細亜を日支両国の国民によつて取返すこと」が日中戦争の意義であった（p. 8）。

では王子恵の考えるアジアとは何か。王子恵は具体的には言及していないが、「亜細亜の精神の特質は（中略）西洋文化の特質との比較によつて明らかに示され、（中略）西洋との対比に於て亜細亜の本質は把握される」（pp. 6-7）という説明、「亜細亜の敵は云ふまでもなくヨーロッパの東漸的傾向」とする点（p. 40）、アジア的同盟を精神的同盟とする点（p. 45）等から、欧米との対抗を前提とした精神的な連帯であったと言えよう。

ただ、その具体的な内容にはほとんど言及がない。王子恵は「亜細亜の「明日」の一つの条件」として、「アジア民族は、お互いに帰化の自由を獲得しなければならない。印度人は何時でも支那人になり得る。支那人は日本人に何時でもなり得る」（p. 59）とするが、具体的な話ではない。王子恵は、アジアの平和は「惹いては世界の平和にまで及ぼすと云ふことにならなければ本当の意義がない」（「中支経済座談会」，pp. 8-9）とするが、いみじくも本人が繰り返したキーワードである「理想」の枠を出るものではなかったのである。

日中関係

王子恵は維新政府の名前は、明治維新を連想させるが、それは単に言葉の上にとどまるものでなく、「明治維新の持つ精神、意義、影響を今新に、中部支那に実現しなければならない」（p. 96）とし、「我々の理想と行動との根底には、明治維新そのものが存在する」と明言していた（p. 101）。

蒋介石・国民党についても、「支那国民とは、^マ全^マた^マく利害相反する関係であり、何等本質上の一致性を持つて」いないと断定した（p. 31）。

王子恵によれば、日中両国の結合は単に物資の欠乏を充たしたり、物的な欲望に備えるための結合論、親善論では説明できず、「日本は指導者として支那に臨み、支那は指導されるものとしてこれに対する事が、両国の結合の本諦」（pp. 9-10）と説いた。

そのために飛躍した議論であると留保をつけながらも、「日支両国間は、少くとも此処当分の間、一切他との国際関係を絶つて、二つの国だけが交誼を守り、二つの国だけが結ぶ」べきとしたほか (p. 61)、「最も効果的に両国の言語一元化を実現しうる方法として、支那国民が全部日本語を学び、日本人が全部支那語を学ぶ」ことを提唱した (p. 53)。また日中間の関税も撤廃するべきとした (野依秀市, 1938, p. 186)。すでに日中戦争以前から王子恵は「日支両国の同盟は、結局に於て合邦にまで持つて行く位の覚悟でないとうまく行かん」と考えていたという (長田実, p. 266)。

漢民族の力

ここまで見てくると、王子恵は全面的に日本の優位を認めた議論、日本にとって都合のよい議論を、日本人に代わって主張したようにも思われる。しかし、本当にそうであろうか。王子恵の主張の重点は実はここにはなかったように思われる。

というのも、王子恵は議論の中で、漢民族に対する愛とその力についても強調しているのである。王は「私は吾々漢民族を愛し、吾々を育てくれた中国の国土を熱愛する。そして私はこの民族愛、国土愛を永久に持ち続けたい」とし、漢民族・中国の国土を維持するには「日支両民族結合による新亜細亜体制の建設以外にはない」という立場からも議論を展開した (報知新聞政治部, p. 47)。日中戦争についても、「漢民族の軍隊が、敵と戦ふて破れる事を、どうして希望する事が出来ようか」 (p. 31)、「支那に支那国民の誇りがある。これは洵に正しい事であり、必然の事」 (p. 71) と明言していた。

王子恵は、漢民族は、決して弱い国民でなく、「何人の支配の下に立たうとも (中略) 五億を越ゆる大国民が一大組織を結成する時、それこそ恐るべき大国民となる」 (p. 36) など、日本への牽制とともとれる発言も残している。当時、王子恵に会見した山本実彦も「支那の兵も強いし、お国の兵も強い」と「日本兵の強さに言及する前に支那兵の強さを語った」王子恵の発言を、「祖国愛の現れ」と見ている (山本実彦, p. 83)。

また王子恵は中国に対する日本の在り方にも註文を付けた。王は「指導とは、指導の力によつて、指導さる者の要望を充たす関係」 (p. 10) で、「四億五千万民衆の心こそ、(中略) 尊いもので、その獲得のために日本は「支那の国民を愛する」ことが必要とした (pp. 25-26)。さらに今回の戦争で「支那の国民の体力、野性的な戦闘力等は、決して脆弱なものではなかった」 (p. 46) とし、「日本の民族的発達、支那との結合を条件として、その次の段階を目指してのみ、無限の将来を予想することが出来る」 (p. 38) と喝破したのである。

王子恵の議論の重点は、日本と中国が共同歩調をとることをアジアの理想とし、それに基づいて中国を建設することに置かれた。王は蒋介石の国民党政権やその容共政策は、民族的に誤謬であり、アジアの喪失と説明したのである。「仮りに、百万の両国同胞が失はれるとするも、これによつて、将来百年間に涉つて輝かしい東亜の平和が保証されるとするならば、いはゞ一年平均一万人の犠牲に過ぎない」 (p. 2) という発言にうかがえるように、王子恵の主張がかなり長期的な展望を想定してなされた点も特徴がある。

こうした王子恵の議論は、具体性を欠き、政策実現の面ではほとんど力を持つことはなかった。北吟吉も王子恵の「思想が余りに高邁にして常人の理解を超越」し、「支那側及

び日本側の定石派の諸君と幾度か衝突せり」とする（北吟吉，1939a）。

ただ、抽象度の高い王子恵の議論は、一方で日本人の中に王子恵を熱心に評価する人を生む一因となったように思われる。王の「亜細亜の理想」は、その抽象度の高さ故に、融通無碍でもあり、日本の快進撃が伝えられる中、日本人がそれに自らの思いを重ねることも容易であったと思われる。

作家の尾崎士郎は「彼〔＝王子恵〕と向ひあつてゐるだけで私はこの人物の中にひそんでゐる輝くやうなものにハツキリ触れることができたのである。これほど透明な印象を人間からうけることは滅多にあるものではない」（尾崎士郎）と王子恵を激賞したが、これは王の醸し出す雰囲気、その理想主義的主張が相まって、文士の魂をくすぐったものと見て大過なからう。

上述のような王子恵の主張は、1938年12月末に国民党の汪精衛が重慶を脱出し、日本との和平運動が具体化する中で変化を余儀なくされてくる。1938年10月、武漢陥落直前のラジオ放送で、「今日の党軍は百戦百敗し、すでに切羽詰まった状態であれば、汪精衛はいったいどこにその理想とする半共産の国家を建設しようとするのだろうか」（王子恵，1938a）と汪精衛を名指しで批判した王子恵だが、1939年1月にこの論考が再度掲載された際には、「汪精衛」が「多くの党の要人」、「党軍」が「党共残軍」とそれぞれ改められているのである（王子恵，1939a）。

4) 実業部部長の辞任

相反する王子恵評価

1939年頃から維新政府内で、王子恵に対する圧力は強くなりつつあった。王子恵については、萱野長知がその革新性に強く期待していたことは触れたが、他にも「頗る潔癖で、才気煥発、あれ位才分の豊かなものは日本人にもあまり類が少なからう（中略）一種の国士として扱つてよい人物」（野依秀市，1939，p. 305）や、尾崎士郎の「丈の高い、精悍の気が眉宇にあふれた見るからに颯爽とした偉丈夫で、——テキパキした動作や言葉にも新鮮な情熱が深い翳^{かげ}をかくしてゐる」（尾崎士郎）といった評価のように、王子恵にそれまでの中国の政治家にはない斬新さを観る立場は根強く存在した。

これには王の日本語能力も影響を与えていたと思われる。王の日本語については、先述の尾崎が、維新政府で「王子恵だけは語尾の明瞭な、曇りのない日本語で〔訪問した日本人〕作家の一人一人と談笑してゐた」（尾崎士郎）とする他、新聞等でも「日本人の日本語の訛を注意してくれる親切^{しんせつぎ}気さへ持ち合はせてゐる（中略）角帯を締めさせれば、れつきとした老舗の御主人で、義太夫でも習ひかねまじき日本的な、あまりに日本的なその印象」（『読売新聞』1939）「彼の日本語は実に堂に入つたものであり、喋べらせて置けば、田舎訛の東京人よりは垢抜けのした東京弁が実に明快（中略）俳句もひねれば、和歌も詠む。啄木を語れば、明治・大正文学についても一家言を以て滔々と徹宵論断する」（報知新聞政治部，p. 46）のように、王の紹介では、ほぼ例外なく言及していた（馬郡健次郎 p. 93，野依秀市 1940，p. 45 等）。王子恵も日本語を生かして、大川周明・久原房之助・三木武吉・

古島一雄など知名の士との交流を積極的に模索していた（大川周明顕彰会，p. 193・195，岩井英一，p. 402）。

一方，王子恵に反対する人々は，王が実は上海事変で日本軍を翻弄した王晦知なのではないかという噂があったことや，王と重慶国民政府との関係を問題にしていた（田尻愛義）。

当時憲兵として上海にいた林秀澄は王子恵について，「えたいのわからない男でございまして，二重国籍なんか持っているんじゃないか」とし，維新政府が上海から南京に移った後も，王だけが「官舎に立てこもって南京に赴任」しなかったことを疑っていたという。重慶国民政府との関係についても「王子恵の実力というのは，私全然わからない」とした上で，「重慶と連絡がある，私をお使いになれば重慶との和平工作ができるというのが王子恵の売物だった」とし，「日本人が引っかかりやすい人物」と結論づけている（木戸日記研究会，p. 89，pp. 168-169）。

しかし林が，王子恵が本当に重慶と繋がりがあるのかを疑い，「この間まで孔祥熙の使者が二人私の家へ来て」いたという王の発言を，「ほら」として切り捨てている点には問題がある。というのも，後述するように，王子恵が孔祥熙の秘書である賈存徳と関係があったことは，賈の回想や，日中の水面下で和平工作に当たった松本蔵次関係の書翰等で明らかためである（伊藤・鳥海，1978，no. 89）。このことは王子恵が事実を語っていながら，それを真に受けてもらえない，ある種の胡散臭さをもまた醸し出していた，ということも示している。

王子恵が酒も嗜まず（尾崎士郎），中国の官僚気質に馴染めないことも問題であった。野依秀市は，王子恵が「支那人にして日本人の心を持つてゐる男」で，「頗る潔癖」であったことから，「所謂支那の役人と肚が合はない。維新政府でも孤立無援だった」とし，「支那では格別怪まずにやつてゐる役人生活のことでも，彼〔＝王子恵〕の眼から見ると怪しからん，といふやうなことから，自然と折合が悪くなつたのであらう」と推測している（野依秀市，1939，p. 305）。

王子恵自身もしばしば不満を口にしていた。1939年3月，上海を訪問中の小川平吉に向い王子恵は，「現状を維持して自己の利を図るに汲々た」る維新政府部長らを批判したのみならず，「日本の現地軍部，亦認識不足して，中央も亦同様なり，と憤激し」た。さらに維新政府の中に王子恵暗殺を謀る動きもあり，これに危機感を持った王は「過般来辞職を乞ふも許されず」，ついては「進んで日本に赴き，〔日本〕政府に〔維新政府の〕政治状態を訴へ，今後の処置を促さんと欲し悲壮なる決意をなし」た，という（小川平吉，「日記」1939年3月26日）。

この事情を知った萱野長知は，上海の松本蔵次に対し，王子恵が東京に行き運動をすることをしばらく中止することを要請し，「余りあせらぬ様，〔王に〕御注意被下度候」と書き送っている（伊藤・鳥海，1978，no. 97）。王の東京での運動は結局実現しなかったが，王子恵と他の維新政府官員との関係はもはや修復困難な状況に至っていたと言えるだろう。

実業部部長の辞任

1939年8月10日、維新政府議政会議は王子恵の依願退職を認め（『南京新報』）、王は維新政府を去った。そもそも王子恵の部長就任当初から、日本の外務省は時期を見て「王を引込める」方針で（田尻愛義）、1938年3月7日の陸海外3省の関係者協議でも、王子恵を「出来得る限り速かに罷めさせる」ことが既定方針となっていた（「中支新政権組織大綱」）。日本軍占領地に新たに設けられる湖北省省長に王子恵が想定されている、といった報道も、王子恵下ろしを裏付けるものであろう（『申報』）。

1939年8月は汪派国民党が上海で党大会を開催するなど、新たな中央政府樹立の動きが具体化しつつある時期でもあった。現地日本軍も、新中央政府が維新政府との間で経済的な諸問題を解決する際、「王子恵等の存在は（中略）好ましからざる」ものと見ており、維新政府内部に実業部の改組刷新を熱望する声があることも擱んでいた。こうして「王部長の自発的辞職方を工作」し、「後任者は汪〔精衛〕工作とも関係せしめ、取敢へず部長心得を現在〔維新〕政府に在る部長又は次長級より選定する」方針が決められた（伊集団軍参謀長）。

王子恵の辞職を同盟通信の報道で知った萱野長知は、松本蔵次に対し「長らく掾^{えん}の下の力もち」をしてきた「因縁深き吾人としては、切齒暗涙あるのみ」、とその悔しい胸の内を披瀝した。王子恵に対しても「是れからが真に本腰に努力すべき時」であり、「一朝の蹉跌に落胆するやうの人物では我友にあらず」と激励すること、また「之より不倒翁^{これ おきあがりこぼし な}と為り、心を冷静に泰然自若として、チョコチョコウロタエヌ」ことや、東京行っても「泣きゴト言ふ勿れ。又人の悪声を放つ勿れ。大きくドッシリして、万事を馬耳東風にして動かざること山の如く、敗軍の将兵を語らずの気持ちにて折衝する」ことを伝えてほしい旨したためた。萱野は終始王子恵の将来を気にかけ、また支持し続けたのである（伊藤・鳥海、1978, no. 146）。

Ⅲ. 維新政府以後の動き

1) 萱野長知との和平工作

王子恵が維新政府を離れた翌年、1940年3月に汪政権が成立し、維新政府は解消された。王子恵は汪政権とは始終距離を取った。後述するように、王子恵は汪政権に対して批判的であった。また一方の汪政権中枢も王子恵辞任をめぐる一連の騒動は当然知っていたと思われる。王子恵を政権に取り込む可能性は無かったと思われる。

日本占領地の社会体制は、ひとまずは汪政権を中心に再編成されつつあった。その中で王子恵が埋没せず、再び日中の間での浮上を目指せば、王に残された選択肢は、汪政権を批判し、重慶国民政府と日本の和平を仲介する他にはあまり無かったとも言えよう。

王子恵と萱野長知らの交流はその後も続いた。1938年11月に王は日本を訪問し、熱海・神戸等に滞在していたことが確認できる（伊藤・鳥海、1978, no. 180, 182）。さらに1940年8月から9月にかけては、和知鷹二・板垣征四郎・岩崎清七らと、孔祥熙を交渉相手と

した和平工作の仲介に当たった（伊藤・鳥海，1980，no. 257, 258, 261）。孔祥熙が交渉相手になった理由について、宇垣一成は「日本とあまり関係が深くない」人が良いとして、孔祥熙を指定したとしている。（宇垣一成，1970，p. 1245）

この交渉の具体的な動きは岩崎清七の伝記が助けとなる（小川桑兵衛，pp. 101-113）。それによると、汪政権成立後、来日していた王子恵は岩崎に対し、「支那は蒋介石主席でなければ治まらない。汪精衛氏では、国民大衆の信望を繋ぐに足りない。日支の両国が何時までも、戦争を続けてゐることは、人類の福祉と言ふ大きな点から考へて見てもいけないと思ふ」等と語り、その後岩崎の引き合わせで、当時伊豆長岡にいた宇垣一成と熱海で会談した。

この会談では「王子恵も蒋介石や他の要人達と知り合い」という程度で、また当時宇垣も政治の一線から退いていたこともあり、具体的内容の申し合せはなく、善後策の検討をしたに過ぎなかつた。しかし、「可及的速やかに、和平を講じて、両国民の福祉を招来しよう」という点だけは一致し、上海で準備交渉を行い、費用は岩崎が負担することが決まった。

ただちに王子恵は帰国し、その後岩崎に二度にわたって「重慶との交渉は段々と具体化しつつあるとの通知」を送った。さらに重慶の要人（他の史料から孔祥熙と思われる）の秘書から来信があったため、岩崎に上海で直接交渉に当ってほしい、と要請した。

上海に赴いた岩崎に対し王子恵は、重慶側から「条件次第に依つては、和平会議を開いて、協議してもよいと言つて来た」とし、「一、媾和条約締結後の日本は即時撤兵する事、但し、共匪（＝共産党）の騒乱の片付くまで、治安維持をする事（在留日本人の生命財産を保護する為め）。一、七月七日の盧溝橋事件以前には、さかのぼらない事。一、北支の權益に就いては、最小限度のものは認めるが他の新しい權益は認められぬ事」など四五項目を提示した。しかし、回答を重慶側に伝えるための使者は結局戻らず、交渉は進展しなかつたという。

一方、賈存徳は次のように回想している。1940年4月、東京から戻った王子恵から賈存徳に、軍部及び板垣征四郎は速やかに戦争を停止することを望んでいる、和平会談は重慶政府を相手とし、汪政権には反対する、という意向が示された。さらに5月には王子恵から、板垣征四郎の自筆鉛筆書きによる5項目、1. 共同防共、2. 中日経済提携、3. 汪政権の解消、4. 休戦、5. 撤兵、の草稿が届けられた。

翌6月、賈存徳は板垣の草稿と汪政権が発行した「還都紀念」の冊子等を携えて重慶に戻り、孔祥熙に手渡した。しかし同月から日本軍の重慶攻撃が激しくなり、重慶で日本との和平工作を行う状況は厳しさを増していた。7月末に重慶を訪れた王子恵の使者蔡森に対し、賈存徳は、板垣による正式な書類作成を要求するとともに、活動資金を渡した。

その後、上海江湾の王子恵寓所で賈存徳・岩崎清七・王子恵・蔡森の会談が行われた。冒頭王子恵の要請で議事録を作成することとなり、岩崎からは蒋介石を明治維新に尽力した伊藤博文に擬する発言があったという。しかし、日本側が作成した文書には、話し合ってもいない具体的な日本の要求が書き込まれていたこともあり、賈らは日本側に不信感を

持ち、結局交渉は纏まらなかった。王子恵も会談では話を聞くだけで、自らは発言しなかった。賈存徳によれば、その後も王子恵は香港を舞台に和平工作に関わっていたという（賈存徳，pp. 74-78）。

2) 汪政権批判

1942年1月、木村英夫は王子恵と会見し、非公開を条件にその発言を記録している。その中で王子恵は、「一方において諒解を与えた事項でも、他の一方において封じられる不合理は茶飯事である」と日本の対応がしばしば変わることを批判し、「国論の統一と真意の表現は事変処理の第一義的な緊急問題である」と述べた。

汪精衛についても「日支全面和平（中略）の使命を遂げる実力がない」と批判し、「宣伝部長格汪精衛を首班とする汪政権」ではなく、「百万の中央軍を有し且つ現代支那第一流の実力と魅力を有する蔣介石をして、日本と協力の下に共産党絶滅の大任に当らしめることが最上の策であり、大東亜戦下の今日を以て対蔣工作は絶好の機会」と、蔣介石を相手とした日中和平に期待する旨発言している（木村英夫，pp. 223-226）。

以後、王子恵の戦時中の活動は確認できていない。

IV. 戦後の活動

1) 上海・日本での動き

頓宮寛によれば、1945年末に王文成と名を改めた王子恵が上海の福民病院を訪れた。王は「蔣總統の使いの者が来て、頓宮先生に会いたいとのことである」と告げ、頓宮は王子恵宅で蔣介石の使いの者と対面したという（南堀英二，pp. 298-299）。

日本の敗戦後東南アジアに潜伏していた辻政信も、1948年上海で王子恵の世話になっている。辻は、王子恵は「一昨年（1946年）日本に渡り、日華合作に当つたが複雑な内部の勢力争いによつて召還されていた」としているが（辻政信，p. 288）、少なくとも1947年6月に、王丕承（国民政府駐日代表団軍事組組長）の肝入りで王子恵が渡日していたことは、今井武夫（元支那派遣軍参謀）も擱んでいた（今井武夫）。

王子恵は1949年3月には「蔣總統の旨を受けて来れり」と葉山に宇垣一成を訪問した。王は「蔣氏は、今度こそは全然過去怨讐を忘れて堅く中日協同して共産主義を撲滅したき決意を有すると語り」、宇垣の決意と協力を求め、その後もこうした活動は同年7月頃までは続いたという（宇垣一成，1971，p. 1763, 1775頁）。

岩井英一も王子恵が「終戦後、名を王文成と改め蔣介石總統の私設顧問という触れ込みで、代表团と共に来日したのには驚かされた（中略）単なる山師というには余りにも大胆不敵であり、まさに怪物」と記している（岩井英一，p. 403）。

このように戦後も王子恵が活動できた背景には、王と汪政権の間に終始一貫して距離があったこと、さらに王が重慶国民政府と水面下で和平工作を行っていたことが関係しているよう。これらが言うなれば免罪符となり、結果王子恵は「漢奸検挙」も免れた（辻の指摘）

のである。

2) 国際実業設立

戦後王子恵は日本と上海を往復していたと思われるが、少なくとも 1952 年のサンフランシスコ平和条約締結の前後には東京日比谷の日活国際会館内に国際実業（「実業」は実業部を想起させる）という会社を設立していた。

岩井英一によれば、「来日後の彼は、（中略）新しい日華関係貿易再建のためと称し、実業部長当時コネをつけていた政治家の名を利用し、或はこれらの人達の諒解があったのであろう、再建のための運動資金とか、新会社への出資金とかの名目で、戦前から中国で儲けた企業や商社から金集めをした」という。国際実業には岡村寧次（元支那派遣軍司令官）・野村直邦（元海軍大臣）・徳川義親（尾張徳川家）など、戦時中に王子恵と関係を築いたと思われる人々が顧問に名を連ねていた（岩井英一，p. 403）。

1952 年 8 月、王子恵は当時経営不振に陥っていた尼崎製鋼常務（経理担当）伊美要に「香港の財閥永安公司から二十億円を日本に導入するのでそのうち八億円を融資してやる」と信用させ、1953 年 9 月頃に「最後の仕上げの費用に」と 500 万円を借り出したまま踏み倒した。同様の手口で日本全国 17 都道府県の財界人 40 人からも資金を借り倒し、その総額は 7 億円に上った。王はこの容疑で 1957 年 10 月に逮捕された（『朝日新聞』、『読売新聞』1957）。

王子恵が初めから踏み倒しを考えていたのかは、「中国政府から金をもらう予定で、このため次男の王文賢を台湾に行かせている」という本人の発言もあり（『読売新聞』1957）、留保が必要である。ただ少なくとも王子恵が戦後の日中間交流再開を見越して、これに積極的に関わろうとしたことだけは確かなようである。

戦前日本の占領地の政権に関わった人物が、戦後の日本で再起を模索する動きは、例えば韓雲階（元満洲国經濟部大臣）が亜東銀行設立に関わった（『読売新聞』1951a, 1951b）ように、他にも確認できる。またこの時期、趙毓松（汪政権実業部部長）・胡蘭成（汪政権宣伝部次長）といった人々が、台湾の国民党政府とも大陸の共産党政府とも異なる、中国の第三極を目指す動きもあった。詳細は不明だが、王子恵がこうした動きとも連絡をとっていることを台湾の中華民国政府も掴んでいた（蔣中正檔案）。

V. おわりに

本稿では日中戦争当初、日本占領地で政府樹立工作に関わった王子恵という人物についてその事績を整理してきた。その結果次の 4 点を明らかにできた。

1 つめは、日本占領地で政権樹立に際し、どのように人選が行われていたのか、またその結果如何なる問題が生じたのかを具体的事例に即して検討できた点である。とりわけ王子恵を強力に推した人物が、孫中山以来国民党要人とも関係の深かった萱野長知であった点は興味深い。萱野は日中戦争を、辛亥革命と似たような事象として捉えていたと思われ、それに対応できる人物として王子恵を想定していたのである。

2 つめは、維新政府時期から汪政権時期にかけて断続して行われていた対重慶和平工作の一端である。王子恵は宇垣一成や板垣征四郎らの意向を携えて賈存徳らと交渉したが、具体的な動きには至らなかった。こうした交渉の水面下の動きを知ることは難しいが、日中に残された複数の回想録を比較対照したことで、少なくとも王子恵を仲介とした工作があったことは確認できた。

3 つめは、戦前戦中戦後を連続する意識の存在である。王は戦前の上海で日中間の経済提携を試み、日中戦争を契機として、政治の表舞台に登場、実業部部長辞任後も、重慶国民政府と和平工作に関わり続け、一貫して日中間を取り持つ活動に身を置いた。さらに戦後は、国共の対立が先鋭化する中、国民政府と日本との間で反共を旗印に両者の接近を試み、その後も日本と中国の交流回復を見越して水面下で積極的に動いた。

こうした活動を見れば、王子恵が戦中戦後を問わず、日中の狭間に自らの活動の舞台を見出していたことは確かである。王の中で戦前と戦後はそのまま繋がっている。しかしこうした手法は、日中両国間の関係が流動的で、また複数のパイプの併存が常態化していた環境だからこそ可能であり、また価値を持つものでもあった。戦後十年を経て日中関係、中台関係が徐々に安定化（固定化）する中、王子恵に代表されるような人物の入り込める要素（狭間）は少なくなっていくように思われる。王子恵が逮捕され、その活動が終焉を迎えたのはまさにこうした時代の転換期であった。

4 つめは、王子恵の個性が周囲に与えた問題である。王子恵は就学時期を日本で過ごしたこともあり日本語に堪能であった。このことは単に日本語でコミュニケーションが取れたということにとどまらず、日本人との間により深いレベルで信頼関係を築き得た、ということでもある。

一方で堂々と自らの考えを披瀝し、謙遜することなく自らの有用性をアピールする態度は、どちらかという中国人としての、あるいは中国社会での経験によって育まれたもののようと思われる。また穿った見方をすれば、王子恵が王文成（王文成公＝王陽明）なる別名を用いていた点に、「心即理」「知行合一」的とも言える、王の積極的な行動意識を見ることができよう。こうした王の独特なキャラクターもあって、日本人の中には王子恵に過度の期待を寄せる者が出たのである。

最後に王子恵が如何なる目的を持って行動していたのか、という点についても触れておきたい。王子恵は日本当局から見れば協力者であり、また重慶国民政府にとっては日本との橋渡しの一人に過ぎなかった。しかし、王子恵に寄り添って見ると、こうした日中間の問題に積極的に関わることで、社会的な上昇を目指そうとしていた姿が顕著である。王と宇垣との水面下の交渉について記した小川桑兵衛は「王子恵は非常な野心家である（中略）蔣、汪と肩を並べ得る、大政治家になろうと考へてゐた」と言い切っている（小川桑兵衛，p. 112）。王の目標が「大政治家」であったかはさておき、少なくとも王子恵が日中戦争によって生じた既存の中国社会体制の動揺を利用して、そこに食い込もうとしていたとは言えそうである。「日支両棲」を標榜した王子恵だが、その存在は日本からも中国からもある種異質なものであった。「両棲」たらんとして、結局王子恵は日中双方のエトランゼに

終始したのである。日中戦争を挟む約二十年間はこうした人物の活躍を許した時代でもあったと言えよう。

最後に、王子恵の正確な没年は不明だが、1970 年前後に東京で没した（岩井英一, p. 404）ということをつけ加えておく。

（せき ともひで・日本学術振興会特別研究員）

文献

未刊行史料（日付順）

中国語

- ・「国民党中央改造委員会第六組呈蔣中正毎日情報」（1951 年 5 月 15 日），蔣中正檔案，80200-346-014-004，国史館。

日本語

- ・田尻愛義→上村課長宛書簡（1938 年 3 月 1 日），支那事変ニ際シ支那新政府樹立関係一件／支那中央政權樹立問題（臨時維新政府合流問題連合委員会関係，吳佩孚運動及反共，反蔣救国民衆運動）第一卷（A. 6. 1. 056）外務省外交史料館。
- ・「中支新政權組織大綱等ニ関シ陸海外三省係官協議結果ノ件」（1938 年 3 月 7 日），支那事変ニ際シ支那新政府樹立関係一件（同上）。
- ・伊集団参謀長「維新政府顧問に関する件」（1939 年 8 月 3 日），陸軍省，陸支密大日記 S14. 78. 167，防衛省防衛研究所。
- ・今井武夫日記（1947 年 6 月 27 日），国立国会図書館寄託史料。

新聞（発行日順）

中国紙

- ・『申報』1938 年 11 月 19 日，2 版「故都羣魔乱舞 漢奸浪人活躍」。
- ・『南京新報』1939 年 8 月 13 日，1 張 1 版「王子恵辞職照准後維新政府仕版更動」。

日本紙

- ・『読売新聞』1939 年 2 月 25 日夕刊，1 面「日語は踊る一日支両棲の王子恵」。
- ・『読売新聞』1951 年 8 月 10 日，1 面「日華合弁の新銀行 資本金二億円 南方向け軽工業に融資」。
- ・『読売新聞』1951 年 11 月 9 日，1 面「亜東銀行発足」。
- ・『読売新聞』1957 年 10 月 31 日夕刊，5 面「王子恵元蔣総統特使サギで検挙」。
- ・『朝日新聞』1957 年 11 月 1 日，1 面「約七億円ふみ倒す 元駐日国民政府代表団員」。

刊行史料

中国語（編著者名ピンイン順）

- ・陳器伯（1995）「梁鴻志与維新政府」江蘇省政協文史資料委員会編『江蘇文史資料集粹』（綜合卷），江蘇文史史料編輯部出版。

- ・賈存徳（1986）「孔祥熙与日寇勾結活動的片断」中国人民政治協商会議全国委員会文史資料研究委員会編『文史資料選輯』29輯，中国文史出版社。
- ・李文浜（1986）「陳群其人」政協福建省委員会編『福建文史資料』14輯，同会。李文浜（李澣）は維新政府内政部総務司司長。
- ・王子恵（1938）『亜細亜之理想』出版者不明。
- ・王子恵（1938a）「建設中国必先革新思想」『中華新声』1巻4期，1938年10月。
- ・王子恵（1939a）「建設明日之中国必先革新思想」『実業月刊』3期，実業月刊社，1939年1月。

日本語（編著者名あいうえお順）

- ・伊藤隆・鳥海靖「日中和平工作に関する一史料—松本蔵次関係文書から（1）」『東京大学教養学部人文科学科紀要 66 歴史学研究報告 16 歴史と文化 12』1978年。
- ・伊藤隆・鳥海靖「日中和平工作に関する一史料—松本蔵次関係文書から（2）」『東京大学教養学部人文科学科紀要 70 歴史学研究報告 17 歴史と文化 13』1980年。
- ・岩井英一（1983）『回想の上海』同書出版委員会。
- ・王子恵（1938）『亜細亜の明日を語る』亜細亜書房。
- ・王子恵（1938b）「日支経済提携の発足点」『文藝春秋』時局月報8，1938年5月。
- ・王子恵（1939b）「亜細亜の理想」『祖国』1939年1月号，35頁。
- ・王子恵（1939c）「維新政府の主張」東亜同文書院『支那』1939年1月号。
- ・大川周明顕彰会編（1986）『大川周明日記』岩崎学術出版社。
- ・岡田尚編（1936）『有民』同人。
- ・岡田尚（1980）「人生七十二年 夢また夢」『江南春秋—東亜同文書院二十四・二十五期生記念誌』記念誌出版世話人。
- ・小川桑兵衛（1949）『日本の興亡と岩崎清七翁』紅龍書房。
- ・小川平吉文書研究会編（1974）『小川平吉関係文書』1，みすず書房。
- ・尾崎士郎「王子恵の印象」『揚子江』1939年5月号。
- ・長田実「孫文革命時代からの在留支那生活二十八年の思ひ出」『実業之世界臨時増刊 興亜産業経済大観』1939年10月。
- ・外務省情報部編（1937）『現代中華民国満洲帝国人名鑑』東亜同文会業務部。
- ・夏文運（1967）『黄塵万丈—ある中国人の証言する日中事変秘録』現代書房。
- ・北永生（吟吉）（1938a）「上海だより（続）」『祖国』1938年6月号。
- ・北吟吉述（1938b）『中支戦線を巡視して 朝野の猛省を促す 革新政策の見地より』日本協会出版部。
- ・木戸日記研究会・日本近代史料研究会（1977）『林秀澄氏談話速記録』。
- ・木村英夫（1994）『敗戦前夜』佐藤咲代。
- ・景梅九著，大高巖・波多野太郎訳（1966）『留日回顧—中国アナキストの半生』平凡社。
- ・新東亜研究会編（1939）『興亜ノート—新東亜の時事問題早わかり』国民図書協会。
- ・関智英（2007）「上海市大道政府と西村展蔵」『近きに在りて』52号。

- ・関智英 (2013) 「日中戦争時期中国占領地における将来構想—中華民国維新政府指導層の時局観」『史学雑誌』122 編 11 号。
- ・関智英 (2014) 「南京戦後の秩序回復と対日和平政権—南京市自治委員会を中心に」『新しい歴史学のために』284 号。
- ・「中支経済座談会」(1939 年 1 月 12 日)『実業之世界臨時増刊 興亜産業経済大観』1939 年 10 月, 中支那篇。
- ・辻政信 (1950)『潜行三千里』毎日新聞社。
- ・野依秀市 (1938)『楽土激土』秀文閣出版社。
- ・野依秀市 (1939)「王子恵を語る」『実業之世界臨時増刊 興亜産業経済大観』1939 年 10 月。
- ・野依秀市 (1940)『南北支那現地要人を敲く』秀文閣書房。
- ・報知新聞政治部編 (1939)『大陸の顔』東海出版。
- ・馬郡健次郎 (1938)『大陸経営』巖松堂書店。
- ・丸山静雄 (1950)『失われたる記録—対華・南方政略秘史』後楽書房。
- ・南堀英二 (2010)『奇跡の医師—東洋一の個人総合病院・上海福民病院を造った慈愛の医業』光人社。
- ・森島守人 (1950)『陰謀・暗殺・軍刀—外交官の回想』岩波新書。
- ・山本実彦 (1938)『大陸縦断』改造社。
- ・『揚子江』1938 年 9 月号 (創刊号)。
- ・早稲田大学紳士録刊行会編 (1939)『早稲田大学紳士録 昭和十五年版』同会。

英語

- ・China Weekly Review (1940), *Who's who in China: Biographies of Chinese Leaders: Supplement to 5th Edition*, China weekly review, Shanghai.